

鳴神山遺跡群出土の文字資料

郷 堀 英 司

1. はじめに

鳴神山遺跡群は、北総開発鉄道「千葉ニュータウン中央駅」の真南約1kmに位置し、印旛沼の西端に注ぐ神崎川の支流、戸神川右岸の標高25mの台地上に立地している。この台地は東西300m、南北600mを測り、東側にいくつかの小支谷が入り込むが、台地のほぼ全域で奈良・平安時代の集落が展開しているものと思われる。

周辺には、当該期の大規模な集落遺跡は検出されていないが、遺跡群の北約1.5kmのところ、下総国分寺所用瓦と同范の宝相華文軒丸・軒平瓦を使用した四面庇建物をともなう大塚前遺跡がある(第1図)。

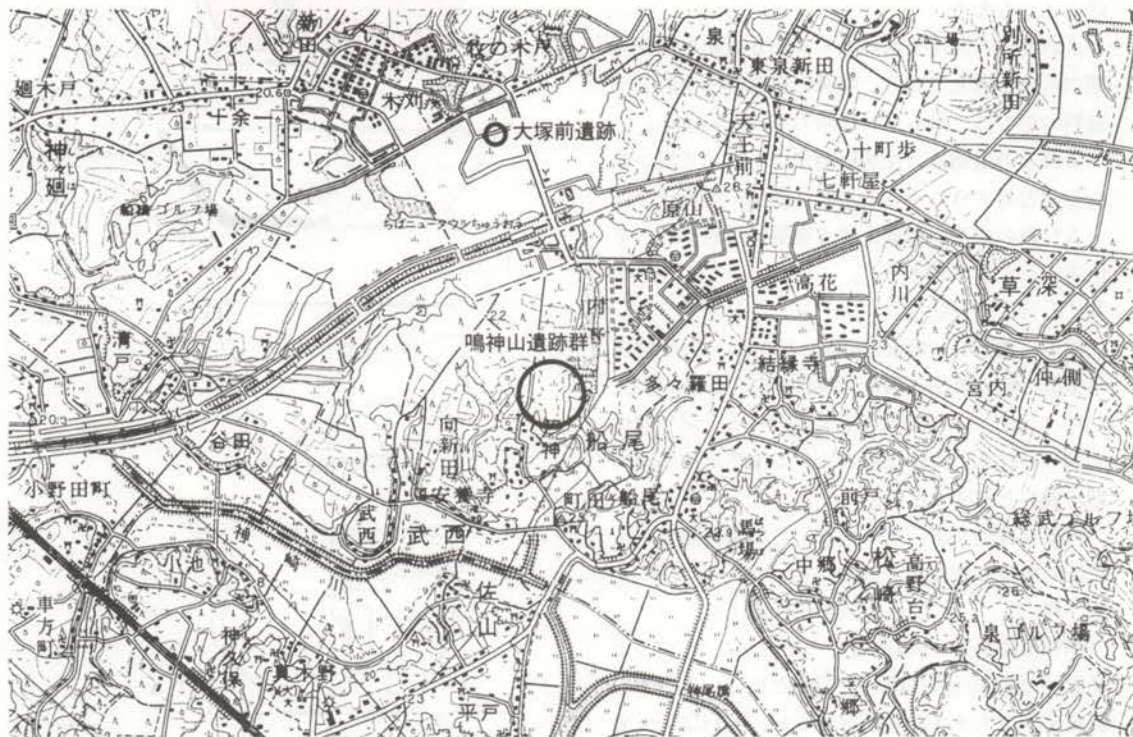
鳴神山遺跡群の調査は昭和63年に開始され、これまでに鳴神山遺跡・同遺跡II・同遺跡III・同遺

跡北・白井谷奥遺跡の5遺跡の約65,000㎡を発掘し、当該期の竪穴住居跡230軒、掘立柱建物跡40棟を検出している。

遺跡の名称は事業主体および調査年次の違いによるもので、遺跡としては一つの大きな集落跡と考えられる千葉ニュータウン内最大の奈良・平安時代の遺跡である。

鳴神山遺跡・同遺跡II・同遺跡北の3遺跡の水洗・注記作業が終了した現段階で墨書土器約550点、線刻土器約310点、へら書土器約10点を確認している。文字資料を多く出土する千葉県内の遺跡の中でもきわめて多量に出土する遺跡の一つといえるであろう。

ここでは、それらの文字資料のごく一部であるが、いくつかの資料を掲載して紹介する。



第1図 鳴神山遺跡群位置図(1:50,000 佐倉)

2. 多文字となる文字資料

出土文字資料の大半は1・2文字記載のものが主体であるが、長文となるものもあり、中には10字を超える記載も認められる。

①「丈尼」(体部内面)・「丈尼／丈部山城方代奉」(体部外面)

鳴神山遺跡—014住居跡から出土したもので、内外面赤彩されたロクロ土師器杯である。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリを施し、底部中央には静止糸切り痕が残っている。

「丈尼」は体部内外面ともに倒位の記載で、「丈部山城方代奉」は横位の記載となっている(1)。

「丈尼」も人名と考えられ、「丈部山城」とともに二人の人名が一つの土器に記載される例である。このような複数の人名を記載する県内の墨書土器例は、管見では確認していない。

この墨書土器は須恵器杯(2)と重なった状態で、覆土最上層から出土している。また、住居南半部では甕と鉢が床面から5~10cm程浮いた状態で、まとまって出土している。この甕と鉢は胴部に粘土紐の輪積み痕跡を明瞭に残す特異な形状のものが多く(3~9)、胴部に焼成後穿孔されたもの(4)もある。

この他にも共伴土器があるが、8世紀第3四半期の所産と考えている。鳴神山遺跡群出土の文字資料の中では、最も古い段階の資料といえる。

これらの遺物は、住居廃絶後に一括して置かれたものと考えられることから、住居の埋め戻しという行為の中で、墨書土器も重要な役目を有して使用されたものであろう。

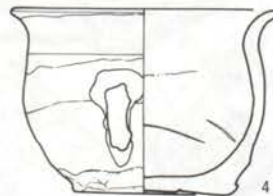
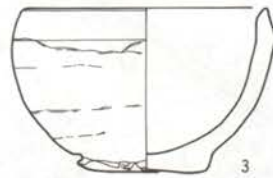
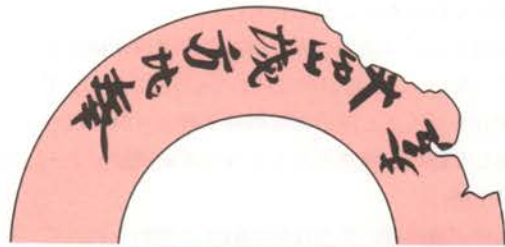
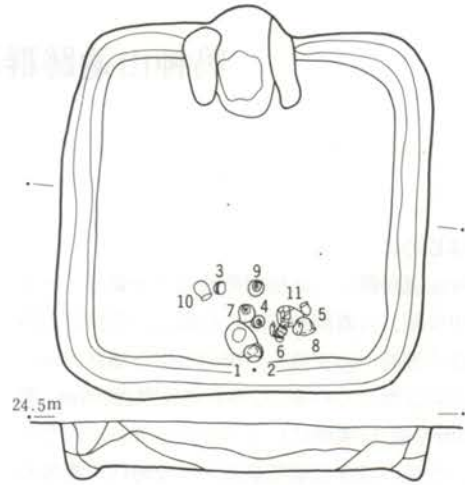
②「□神」「方代□」

鳴神山遺跡II—056住居跡出土のもので、土師器小型甕の胴部外面に横位で線刻されている(12・13)。この二つの資料は接合はしないが、同一個体と考えられる。共伴土器からみて9世紀第1四半期の資料と考えられる。

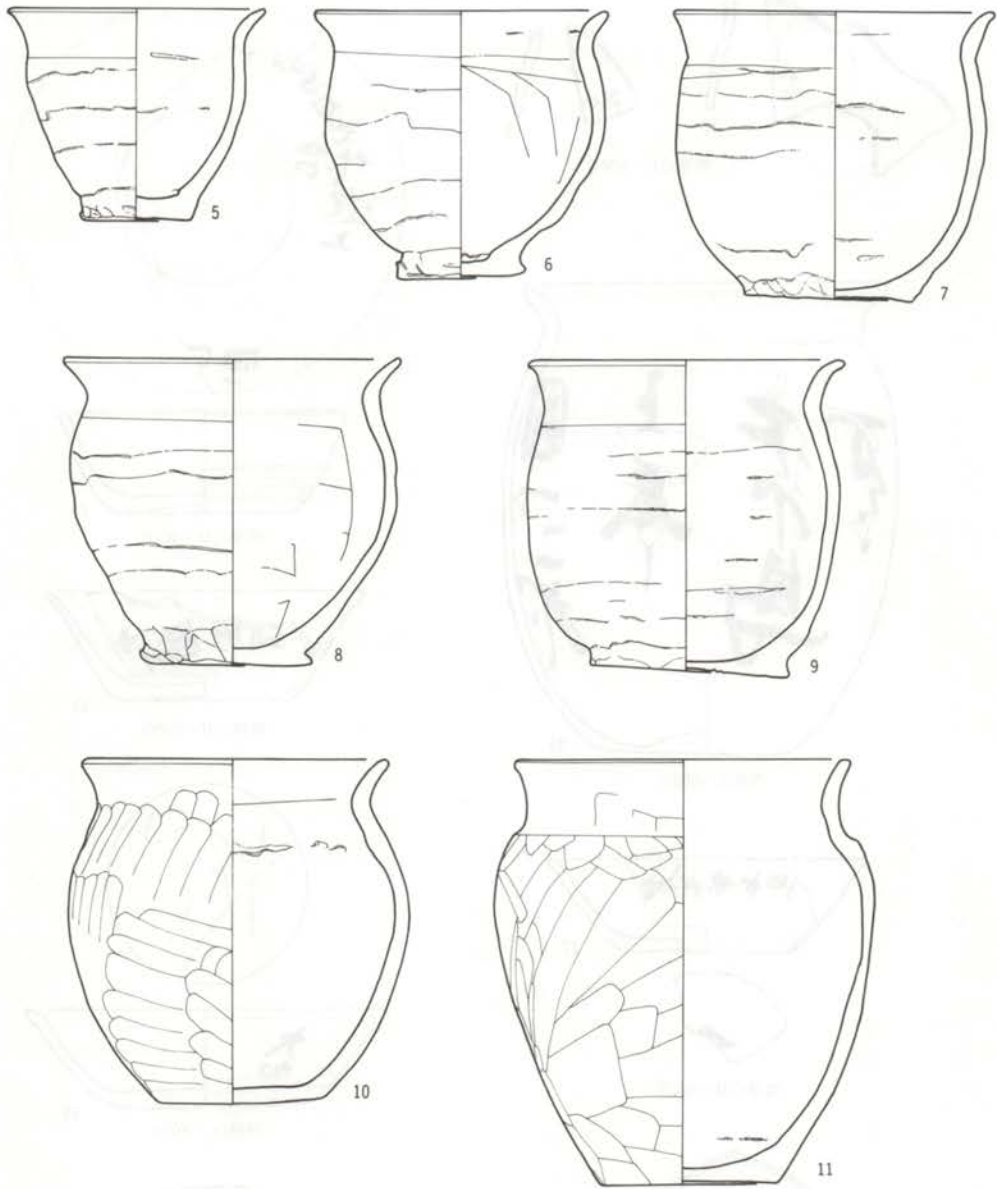
稚拙な線刻文字の多い中で、この資料の文字は比較的繊細な表現となっている。

③「同□□ □□□刀女召代進上」

鳴神山遺跡II—061住居跡から出土したもので、土師器杯の体部外面に横位で記載されている(14)。記載文字の大きさから推定すると、「同」以下、文字の空白部分がないとして、全部で24文字程の記載があったと考えられる。「召」は当初、書き忘れ



第2図 鳴神山遺跡014住居跡 (1/60)
および出土土器 (1/3)



第3図 鳴神山遺跡014住居跡出土土器 (1/3)

られ、後から書き加えたためか、「代」の脇にそって記入されている。

また文頭の「同」で始まる文意が何を意味するか問題であろう。他に同じ内容が記載された資料の存在を示唆するものであろうか。

9世紀第1四半期の年代が考えられるこの住居跡からは他に「酒万」「万」「入」の墨書が出土している。

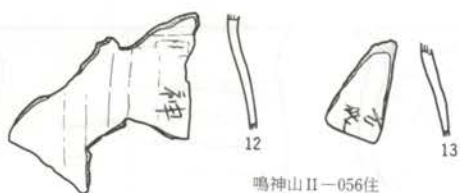
④「國玉神／上奉／丈部鳥／万呂」

鳴神山遺跡—006住居から出土したもので、甕の

胴部に大きな文字で4行にわたって記載されている(15)。1行目の2・3文字目は不明瞭であるが「玉神」と判読した。

墨書土器は床面からの出土である。覆土はロームブロックを多く含む層と焼土粒・山砂を多く含む層からなり、人為的な埋め戻しが為されたものと考えている。出土遺物はきわめて少なく、時期の決定が難しいが、8世紀末から9世紀初頭にかけてのものと考えている。

⑤「大國玉罪カ」



鳴神山II-056住



鳴神山II-061住



鳴神山-006住



鳴神山II-040住



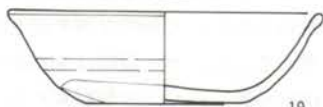
17



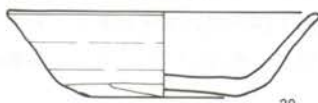
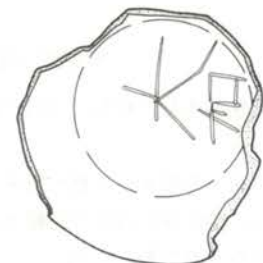
鳴神山II-004住



鳴神山-007住

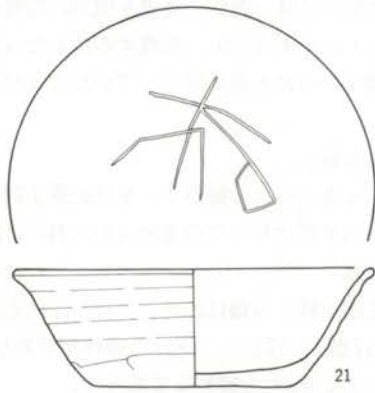


鳴神山II-002溝

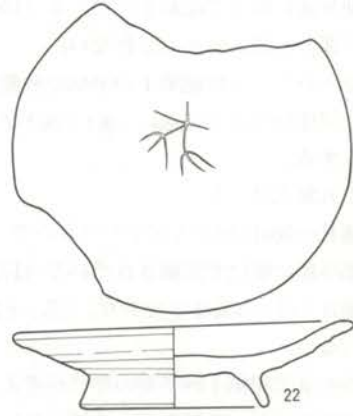


鳴神山II-140住

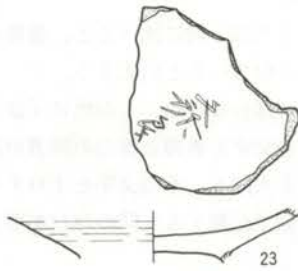
第4図 出土文字資料1 (1/3)



鳴神山-007住



鳴神山-033住



23



24



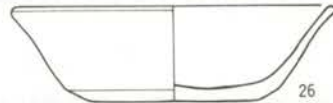
鳴神山II-002溝



鳴神山II-002溝



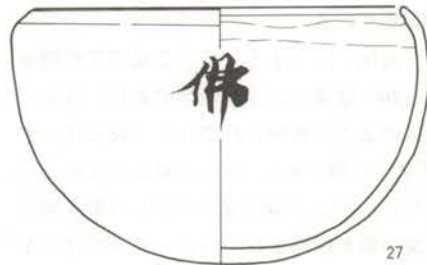
25



26



鳴神山II-157住



27

鳴神山北-201住

第5図 出土文字資料2 (1/3)

鳴神山遺跡II—040住居から出土したもので、土師器杯の体部外面に横位で記載されている(16)。第4文字は「罪」と読めるかもしれない。

共伴土器からみて、9世紀第1四半期の所産と考えられる。同住居ではこの他に「富」「高」などの墨書も存在する。

⑥「□弘 仁九年九月一」

鳴神山遺跡II—004住居から出土したもので、土師器杯の体部外面に横位で記載されている(17)。

第2字の扁は「弓」の異体字であり、「弘」と読めるかもしれない。

土器形態から9世紀第1四半期の年代が考えられるが、第2字が「弘」と読めるならば、弘仁9(818)年の年代が与えられ、土器編年研究上の暦年代の根拠ともなる資料である。また、これまでの房総における歴史時代土器編年の年代観の蓋然性がさらに補強されるものと考えている。

類例としては、八千代市北海道遺跡D048住居跡の「承和五年二月十」の墨書土器があげられる。これは杯の外面に人面墨書、内面に紀年銘と「代」が墨書されており、人名に続けて「形代」あるいは「召代」と墨書されていたものと考えられている(註2)。

鳴神山遺跡例も北海道遺跡同様に人名も記載されていた可能性は高い。

3. 墨書と線刻

鳴神山遺跡群出土の文字資料の特徴として、線刻土器の多さを指摘することができる。また、墨書記載の文字をまねて線刻したと考えられる資料も多い。

⑦「大加」

遺跡群全体の中で「大」「大加」の文字資料は最も多く出土している。この文字の使用期間は比較的長いものであり、9世紀第1四半期から第2四半期まで認められる。

線刻の「大加」は正字としての2文字で表現されるもの(20)は僅かに2点だけであり、ほとんどは1文字のように表現されている(18・21)。すなわち、「大」の第2画が「加」の第2画と共有したのとなり、「大」の第3画も「加」の第4画と共有した文字形が採用されている。さらには、左右シンメトリーなデザインに変化しているもの(22)まであり、正字としての「大加」の認識がまった

くなくなっていると考えられる資料も存在する。

「大加」には一個体に墨書と線刻の両者が記載されたものもあり(19)、記載するにあたって複数の人間が一つの土器に関与していたことがうかがえる。

⑧「久旻良」

人名と考えられる資料で、9世紀第1四半期から第2四半期にかけての遺物(23・24)に記載されている。

第2字「旻」の扁は「方」となっている。これは⑥の「弘」と同じく、「弓」の異体字であり、「久旻良(クミラ)」と読めるであろう。

「大加」同様に墨書と線刻の両者が存在し、一個体に両者が併記されているものも1例確認している(23)。

前述の「大加」例に比べると、墨書と線刻の文字形はよく似ているといえよう。

図示してはいないが、この他に「富」「依」「山本」などの文字も墨書と線刻の両者があり、墨と筆を扱える人間と、その文字をまねるかのようにして線刻で記載する人間の存在が考えられる。

4. 人や土器の移動をしめす文字資料

房総地域における墨書土器の中には具体的な地名や人名が記載されたものも少なからず出土している。ここに紹介する例は人あるいは土器の移動を考える上で問題となる資料である。

⑨「千俣」

鳴神山遺跡II—002溝から出土した9世紀第1四半期の資料である。墨書は土師器杯の底部内面に大きく記載されている(26)。

「千俣」は下総国匝瑳郡千俣郷を示すものと考えられる。これまでに八日市場市柳台遺跡(下総国匝瑳郡)121住居跡と東金市久我台遺跡(上総国山邊郡)SI165住居跡、印西町天神台遺跡(下総国印旛郡)第1地点の住居確認面から出土している。

この「千俣」例からみて、本遺跡や天神台遺跡、久我台遺跡出土資料は、土器あるいは人の大きな移動があったことを示しているものといえよう。

⑩「日下部牛足」

鳴神山遺跡II—157住居跡から出土したもので、須恵器杯底部外面に焼成前のへら書で記載された人名である(25)。

胎土は長石・石英を多く含み雲母末も少量含ん

であり、8世紀中頃の常陸国新治窯跡群の製品と考えられる。

鳴神山遺跡群の人名資料はほとんどが「丈部」姓であり、線刻や墨書が消費遺跡で記入される可能性が高いことを考えるならば、このように個人名が生産地で記載され、消費地にもたらされる場合は、この個人名と土器の使用者の関係はどのようになっていたのでしょうか。

4. まとめ

以上の資料は、鳴神山遺跡群出土文字資料の一部であり、今後の整理作業が進めばさらに多くの知見が得られるものと思われる。ここでは、紹介した資料について若干のまとめとして記述する。

①には人名とともに「方代」の墨書記載がなされているもので、本来ならば「形代」として記載されるべきものと考えられる。これは、八千代市北海道遺跡D146住居跡出土の「丈部乙刀自女形代」の墨書土器例からみてもいえるであろう。

②では「方代」とともに「神」の線刻記載がある。断片的な資料ではあるが、おそらく人名も記入されていたものであろう。ここでの注目すべきことは記載が線刻によること、小型甕であること、表記が横位であることがあげられる。記載が墨書ではなく線刻であること理由としては、この土器が黒褐色を呈していることにも関係しているかもしれない。また、甕でありながらも①と同様に横位で記載することに意味があったのかもしれない。

③はもっとも長文となる資料で、人名とともに「召代」の記載がある。「召代」は「招代」と同義であり、神霊のよりつくものの呼称であるといわれている（註1）。

④⑤は「國玉神」「大國玉」の記載があり、在地神への信仰がうかがえる。また、②にも「神」の記載が認められる。

以上の資料は仏教とは異なる信仰対象が広く認められる事例といえよう。しかしながら、鳴神山遺跡北一201住居跡では「佛」と墨書された鉄鉢形土器(27)を出土した、一辺2m弱の住居跡を検出している。これは9世紀第1四半期の資料と考えられるもので、遺跡群の中で最も北に位置し、住居跡の散漫な地域での検出である。住居としてもきわめて小さなものであることから、想像たく

ましくするならば、僧侶の寓居として建てられていたものとも考えられる。

このことは、ほぼ同時期の信仰の対象として、仏教と「國玉神」等の在地神を重層的に扱っていたものといえるであろう。おそらく、異なる宗教・信仰であっても、当時の民衆としては柔軟な対応あるいは明確な宗教的観念にとらわれない、現世利益的な祭祀形態の現れとして神仏習合がなされていたのではないだろうか（註3）。

⑦は線刻と墨書での字形の変化を考える上で興味をひくものである。墨書の「大加」は正字で書かれながらも、同時に書かれる線刻では、ある種の記号のような形となっており、字に対する理解度が決して高くないことを示していよう。また、この文字が長期間使用される中で、その字形はさらに変化し、もはや、単なる記号として機能していたものと考えられる。

鳴神山遺跡群では同一文字を線刻と墨書で書き表す例が多く、線刻記載の文字はおおむね稚拙な表現となっている。このことは、墨と筆を扱える人と、それをまねて線刻で記載する人との二者が存在し、字に対する理解度の違いが表れたものと考えられる。

また、⑥にみられる紀年銘墨書土器の出土は、奈良・平安時代の土器編年研究をさらにおしすすめるものとなろう。

今回はこれまでに興味をいだいた一部の資料について報告するにとどめたが、これからの作業の中で、より詳細な検討を加えるための助走としておきたい。

註

- 1 平川 南 「庄作遺跡出土の墨書土器」『小原子遺跡群』山武考古学研究所 1990
- 2 大野康男 「萱田地区出土の墨書土器」『月刊文化財』11月号 1993
- 3 栗田則久 「古代集落と墨書土器」『月刊文化財』11月号 1993